

日本語演習 2

高橋 純子

Japanese Language Seminar 2

TAKAHASHI Junko

週 1 コマ (10 週)

登録者数：2 名 (マレーシア、韓国)

主な内容：口頭による発表とそのレポート提出

テレビからの録画ビデオ教材「ら抜き殺意」(永井愛原作の芝居)

狙い：口頭発表、レポート執筆を通して、大学生としての基本的技能を身につける。その際、聞き手に分かりやすい、発表を心掛ける。実際に、板書を始め、実物投影機やハンドアウト、コンピュータを使い、視覚資料を準備して、発表に臨む態度を養成する。

テレビ録画教材は、現在の日本語のバリエーションを凝縮した内容であり、日頃大学構内の日本人学生やテレビなどでよく耳にする日本語のイントネーション、アクセント、表現について学ぶために用意した。

口頭発表の種類として以下のものを提示した。

- (1) 意見を述べる。
- (2) 説明をする。
- (3) 物語り、エピソードを語る。

それぞれ異なる発表形式になるはずだ。その違いを意識しうまく使い分けられるようにさせる。

- (1) 意見を述べる。

新聞、雑誌、あるいはインターネットから拾ってきた興味のある記事を紹介し、その要約を提示し、それについての自分の意見を述べる。さらに聴衆の感想、意見を聞き出

し、討論に発展させる。

技術的な面では、キーワードの板書、OHP機能のある実物投影機を実際に使ってみる、ハンドアウトを作成し要点を提示するといった基本的技能を身につける。

(2) 説明をする。

自分の興味のある分野、趣味、特技あるいは専門分野から何か1つ選び、それを実物、グラフ、写真など視覚資料を使い、聞き手にわかりやすく説明する。なるべく、聞き手にとって未知のテーマ、知っていても表面的知識しかなさそうなものを選ぶように指示。聞き手にわかりやすく説明する工夫を考えさせる。

(3) 物語り、エピソードを語る。

(1) (2) の発表とは違い、声の調子、間の取り方など聞き手の興味を引く工夫が必要になる。また、時系列にそって話しを進めていくのか、原因と結果の順序で話を進めた方が面白いのか、結果から始めてサスペンス効果を狙うのか、など話の演出の仕方を考えさせる。

授業の進め方：学生は各自発表を準備してきて、順番に発表をする。今回は学生が2名ということで、1週に1人の発表とした。発表の後、質疑応答をし、

- (1) のタイプの発表の場合は討論形式に発展させ、
- (2) タイプの場合は質疑応答、同じような経験があれば聞き手からの話を引き出す。
- (3) も発表の後、質疑応答、感想を述べてもらう。

各発表の後で、発表者は自己採点、聞き手は当日の発表についての感想、評価を紙に書く。評価の基準はだいたい以下のような点。

1. よく準備をしていた様子か。
2. 話す時の態度。聞き手を見て話していたか。声が十分大きかったか。間の取り方など。
3. 発音。気がついた発音の間違いがあったらそれを書き留めておく。
4. 文法。間違いに気がいたら書き留めておく。
5. どこが興味をそそられたか。
6. 発表のために工夫していたところ。視覚資料など。

書いてもらった評価票を集め、教師は翌週それを項目毎にまとめ、ワープロで打ち直し、教師の感想、評価、コメントも加え学習者に手渡し、フィードバックとする。

特徴：教師の指導の範囲内ではあるが、できるだけ学習者に自律的に取り組ませる工夫をした。その1つが発表者自身と聞き手の学習者による発表に対する評価である。Peer evaluation である。

もう1つは発表の内容によってどう演出するか考えることである。いつも同じ形で発表をするのではなく、内容、発表のタイプによって話し方を変えるとよりいっそう効果的であるということに気付かせる。

この授業の一番重要なポイントである聞き手に分かりやすい工夫を考え、実行する、ことを身を持って体験することである。

これらの活動は、学習者たちによる評価の目を意識することによって、ある程度のプレッシャーがかかる。学習者同士がいい刺激を与えあい、互いに向上していくというメカニズムが働く。

また、学習者の発表者に対する評価は概ね教師の言いたい事を代弁しており、的確である。また、学習者の批評は、急所をつくと同時に、思いやりに満ちたものであった。教師のストレートな批判より、よほどの的を得ており、やさしさを感じられ学ぶ所が多かった。発表者自身、自分の発表の欠点はたいてい意識しており、そこを二重に突かれるのは辛いはずだ。その点を学習者同士よく庇いあいながら、評価している態度が見られた。

良かった点についても他の学習者から即反応が得られるので発表者は苦勞のしがいがあったはずである。分かりやすいグラフや表を作ってくれば賞賛が得られる。ある問題を提示する際、聞き手に向かってその話題についての知識の有無を問う質問から入れば、聞き手の興味を引き出すいいやり方だと仲間に褒められる、など学習者同士の評価は動機付けとして大きく貢献していたと言える。

問題点とさらなる発展：

本授業は口頭発表とレポートを書く練習が大きな柱である。口頭発表というからには聞き手の人数がある程度欲しい。クラス的人数が多すぎても発表回数が少なすぎてせいぜい1～2回の発表で終わってしまい、前回の発表に対する評価で得た他の学習者や教師からの助言に従って改良する機会が持てないという問題がある。まず、適正なクラスサイズを保てた時に最大の効果を発揮できる。その後は、学習者同士のダイナミクスをいかに活性化するかということが焦点になる。

学習者同士のダイナミクス活性化を図る為に、「俳句会」なるものを企画した。学習者に俳句とは何かを調べさせ、いくつか俳句を探して来させ、紹介させ、その感想を述べあう。その後、実際俳句を作って来て、句会を開く。学習者はたいてい初めてで面喰らっているが、他の学習者の句が思いも掛けないものでびっくりしたり、自分の作った句が他の学習者に選

ばれたりなど、いろいろ発見したり、思い掛けないことに出会ったりする中で心を開いていき、他の学習者の句を褒めることを学んで行く。皆初心者であるから、選び方も個性的で1つの枠に縛られず、句のできばえも必ずしも日本語力とは関連しない。学習者同士のラポールを築く上で有効であったと考える。

発表と言うととかく発表者本人だけの作業のように考えられがちだが、決してそうではない。匿名の聴衆を前にしたとしても、その匿名の聴衆にとってどうやったら分かりやすいかを考えて臨んだ発表と、自分本意で臨んだ発表ではおのずと質が違うはずである。その態度、心構えを身につけてもらうことも本授業の狙いである。そこで肝心なのはクラスの受動的態度、学習者同士のラポールである。俳句会に限らず、学習者同士の共通体験を演出する様々な活動を準備しておくにより効果的な授業ができるのではないかと考える。教える側は、発表以前の学習者同士のダイナミクスの活性化、そして発表、それに続く評価セッションをどうスムーズに演出していくかに力を注ぐことも大切になってくるであろう。